



## 第5回 伝統的暮らしに宿る 村人の幸せ スーダンの村で過ごした1年間



向井信子 (大阪府泉南市)

JDR 国際緊急援助隊登録看護師

アフリカの飢餓問題に関心のあった向井さんは看護学校卒業後、ケニアをはじめ約30カ国を訪ね世界の実情を視察してきました。その間、2007年のスマトラ地震ではAMDAの緊急援助隊の一員として、はじめて海外で医療活動を体験。2008年2月からはNPO法人人口シナンテス(本紙42号で紹介)に属して、スーダンで医療活動に従事しました。これらの国際協力活動の実績が認められ、第1回近畿地区人間力大賞奨励賞(2011年8月)を受賞しました。行動力あふれる向井さんに、看護師と女性の視点からスーダンについて語ってもらいました。

——電気も水もない生活だったんですね。

向井 私滞在したシェリフハサバラ村は、スーダンの首都ハルツームから車で7時間、1,000人ほどが暮らす農村でした。井戸は掘っていたようですが、川へ汲みにいくほうが早い。汲んできた水を、私の背丈くらいの大きな甕にいれ、その上澄みを飲んでいました。私も最初はこんな水は飲めないと思いましたが、日中50℃くらいになるので暑くて、思い切って飲んだら割といける。そのうち泥水でも、このくらいの泥なら飲めると飲

んでいました。食事は村人と一緒に現地のものを三食食べ、ちなみに私はスーダンで5キロ太ったんです(笑い)。

肉はとても貴重でした。時々ヤギや鶏を絞めて食べますが、一番先に男の人が食べ、男の子、女の子と続き、女の人は一番最後。肉のないスープだけになります。アフリカの食事はどこも同じかと思いますが、炭水化物中心で、ビタミンやたんぱく質が不足しています。

——ユニセフの医療支援は入っていましたか。

向井 何回か、村に政府が無料でワクチン接種に入っていました。ただ通信手段がありませんので、スピーカーで呼びかけても、周知徹底できず、結果的に全員に打てないんです。ユニセフは分かりやすいポスターを配布して見せていたので、それを見せながら、私も啓蒙活動をしたのですが、都会と違い、農村の女性は教育を受けていないため、ワクチンの重要性を理解できない。

——知識が受け継がれないと、また一からやり直しになってしまいますね。

向井 教育の問題は難しい。私も最初は絶対に学校へ行くべきだと思っていました。しかし、子どもを皆学校に行かせてしまったら、家の手伝いや水汲みは誰がするのかということになる。親は子どもを働き手として生み、とくに女の子は嫁に行くだけだから学問は必要ないと言います。その親を説得するのは難しいことだと思いました。

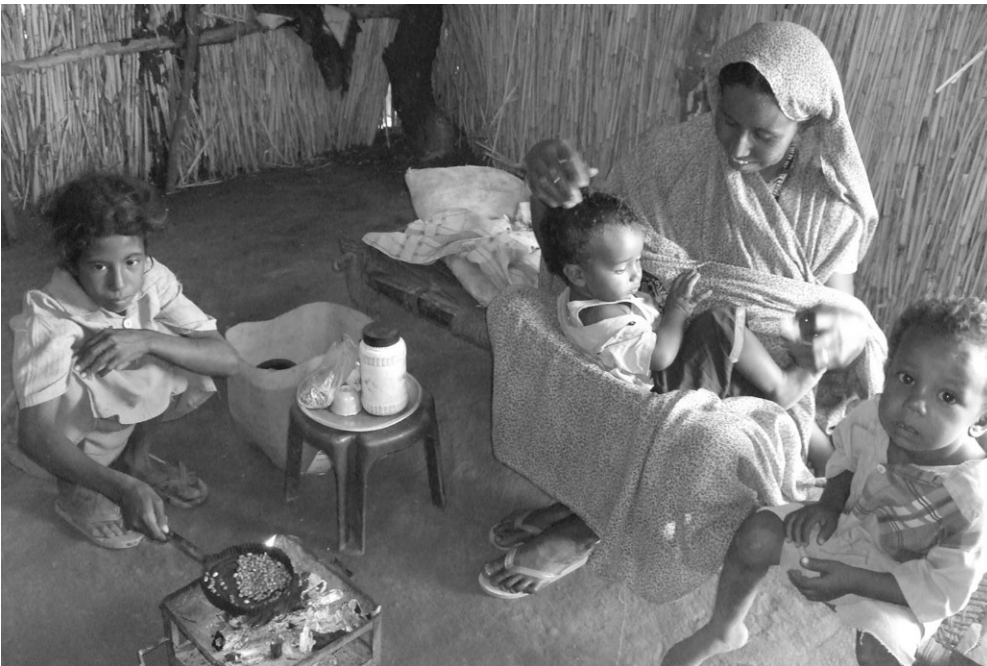
水汲みは小学校低学年のくらいの女の子の仕事です。その女の子も12、3歳になると、親の決めた相手に嫁ぎます。結婚年齢が早く、性行為をして妊娠した場合、出産で母子が危険になるリスクが高まります。政府もユニセフも妊娠年齢をもう少し上げるように言いますが、やはり昔からの習慣はなかなか変わりません。しかし、若い二人は意外に仲が良いので、これも幸せなのかと思ったりします。

——出産には立ち合われましたか。

向井 村の伝統的産婆さんによる出産に立ち合いましたが、壮絶なものでした。妊婦はベッドにまがり、そのベッドの真ん中に穴が開いているんです。天井から



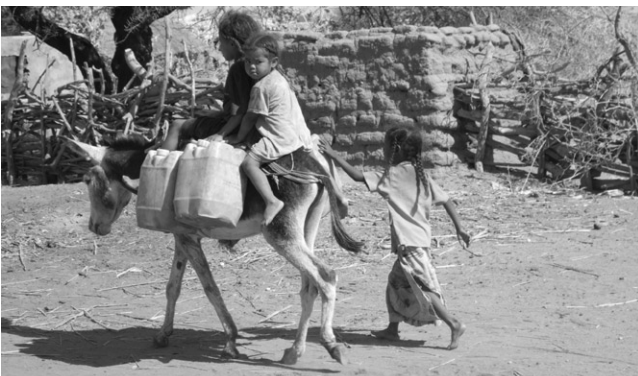
母親に子どもの健康状態を聞く 撮影・内藤順司



家で子どもの世話をする母親

はロープが垂れ下がり、これにつかまって息むのですが、その時声を出すと弱虫と見られるので、歯を食いしばっています。その妊婦の周りを村の女性たちが囲み、皆で応援しながら、牛乳のようなものを飲ませたり、粉をかがせたり、部屋は足の踏み場もないほどの混雑でした。妊婦のお腹は布で隠してあるので、産婆さんは手探りで赤ん坊を取り出し、大変な技術だと思いました。

妊娠中の事故もたくさんありました。一度、産婆さんの道具を見ましたが、海に落ちていそうな錆びたナイフ、これでへその緒を切っているのかと信じられないような代物でした。当初は衛生面をうるさく言いましたが、世の中、白か黒かと一方的にやり方を押し付けても、相手は変わりません。向こうには向こうのプライドがあります。だから家の出産でも、せめて鍔は衛生的なものを使い、危ないときは診療所に来ませんか、譲り合ったほうがうまく行くのではないのでしょうか。おかしいもので、私もいつの間にかロープもありかなと思えるようになっていました。日本のように、きれいで高級な病院で生むば



ロバに乗って水汲みをする女の子

かりでなく、村の女性全員に囲まれて、おめでとうと言ってもらい生むのも面白いかなと。

## 援助頼みからの脱却を

**向井** 診療所では、村人に治療費を払ってもらっていましたが。自分たちで稼ぎ、それを自分たちの給料にするということを、スーダン人のスタッフに分かってもらうほうがいい。将来、日本人がそこを離れても運営できるように、お金を稼い

で回すことを考えないといけない。そうしないと、いつまでも援助を待つという姿勢になり、発展はありません。稼ぎ出すと、稼ぐ面白さも分かってきます。

——平均寿命は何歳くらいですか。

**向井** 49歳で、女性はもう少し長生きかもしれません。私は今病院で働いていますが、日本では核家族化が進み、一人暮らしのお年寄りがたくさん入院しています。子どもはあまり見舞いに来なかったり、孤独死があったりします。対照的にスーダンでは大家族のなかで、皆でおばあちゃんのお世話して、介護が全然苦になっていない。そもそもお年寄りが少なく、みんなが助け合っているというイメージがあります。

——女性の地位向上はまだまだですね。

**向井** 何を視点にするかですが、日本は情報があふれて選択肢が有り余るほどあり、それで悩む人が増えているのではないしょうか。スーダンのように電気も水もない生活で、これが生活と思えば、人と比べることもなく幸せと思えるかもしれません。

女性たちのささやかな楽しみは、子どもの成長と着飾ること、そしてダンスです。結婚式では、皆本当に楽しそうに踊ります。私もいつも一緒に踊っていました。

アフリカは少しずつですが、良くなっていると思います。もちろん一部の地域の貧困や病気はなくなればいいですが、あの大きな大地、皆を受け入れてくる大地は変わらずにいて欲しいと思います。日本とは豊かさの質が違う。日本のようになっていかどうかというのは、大いに疑問ですね。(聞き手・近藤)